

<前回：H・リチャード・ニーバー>

(1) 自由主義神学の継承

1. キリスト教の歴史的類型

トレルチの『社会教説』：教会／セクト／神秘主義の三類型

2. ニーバー『アメリカ型キリスト教の社会的起源』

アメリカ型キリスト教としての「教派」(Denomination)

3. 類型論的思考方法、諸類型

(2) 信仰論と社会科学

4. *Faith on Earth. An Inquiry into the Structure of Human Faith*, New Haven/London, 1989.

(ed. by Richard R. Niebuhr) 『地の上の信仰』

・「信仰の現象学」(編集者の解釈)：複数の自己が相互作用からなる社会とそこに成立するコミュニケーションの場(信仰が成立する場)において、主観主義(信仰は客観的な現実とまったく関わりない、たとえば、単なる主観的な願望の投影)と客観主義(信仰を信仰対象の神からのみ理解しようとして、主体の状況という要因を完全に消去可能とする)の抽象性を排しつつ信仰現象が反省される。アルフレッド・シュッツの現象学的社会科学の意味における現象学。

・「反省の方法」：信仰者が現に行っている「信じる」という行為を批判的に吟味すること。信じるという行為自体の自己批判的検討を出発点として信仰の基本構造を解明する。

他の自己(他者)とのコミュニケーションという相互主観的場における信仰。

5. ブーバーの対話主義に対して：

6. 「我—汝」に対して、信仰の「我—汝—それ」、第三のものとして「それ」。

プラグマティズムとの関わり：ミードの自己論(社会的自己、自己の社会性。

自己は他者(一般化された他者)との対話という社会経験において成立)、ロイス『忠誠の哲学』。

7. 市民共同体：民主主義、自由、平等といった理念(第三の要素)に対する個々の共同体メンバーのコミットメントに基づく、市民相互の信頼関係。

科学者共同体における「真理」、夫婦における「子ども」

8. 信仰：「信頼—忠誠」(Trust-Loyalty)の二項による構成

fides-fiducia-fidelitas

・民主主義的システム：市民と政治家の間の「信じる」

二重の「信頼—忠誠」

9. 「第三の要素」の決定的意義。「信仰」が「我—汝」に還元できない。

・問題：共同体の構成メンバーの間に複雑な利害対立を存在する場合に、そのメンバー相互間の「信仰」はいかに成り立つか。

・利害対立に陥った相手が自分と同様に「第三のもの」(たとえば国家、民族)に忠誠を誓っていることが相互に承認される場合、相手も自分が信頼し忠誠を誓う第三のものに忠実であることに気づくとき、相手にある種の「尊敬の念」を持つことは可能である。

10. 「判断を下し、あるいはそこで我々が判断を行う社会は自己超越的な社会である。自己超越のプロセス、あるいは各々の第三のものを越えた第三のものを指示するプロセスは、存在の全体的な共同体が包括されるまでは、停止することはない」(1963, 87)。

自己超越的な相対主義

(3) 自由主義神学を超えて

11. H・R・ニーバー『啓示の意味』(教文館)

1) 近代の知的状況

「理神論者や超自然主義者が十八世紀初頭にかわした奇跡、預言、啓示、理性についてのそうぞうしい論争」、「理性と啓示とは深く傷を負ってしまった」、「勝者と敗者の見わけはまったくつかなくなってしまった」、「懐疑主義」(11)、「問題とディレンマとは、歴史相対主義によってもたらされた。」(15)

2) 歴史主義 → 歴史相対主義、相対論神学、批判主義

「神学は……その対象を直接叙述することは不可能であることを認識せしめられた。神学

は心理的経験の総体において与えられた現実を探究することができるだけである。このような自己認識が神学に経験論的方法を採用せしめた。その方法は、批判的観念論と批判的実在論との二重の形を持つ。神学みずからの限界を告白しなければならなかった。つまり、神学は神を神そのものとして叙述することはできず、ただ人間の経験において神を叙述することができるだけであること、しかしこうした限界の中で、神学は従来よりも大きな効果を持って働きうる、ということである」、「批判神学」(17)

3) 思想の普遍性？ 批判主義の帰結と聖書学

「形而上学も、また明らかに論理学や認識論も、倫理学と同様歴史的である。哲学的探究のすべての分野において歴史的方法が確立されてきた」(20)、「この限界以内で働く理性そのものが、その歴史的・社会的性格によって限定されていることを認識せなければならぬ」(21)、「すべての現実がわれわれにとって時間的なものとなったということは疑いもなく正しい。しかし、われわれの相対主義は客体の歴史性よりも、それ以上に主体の歴史性を確認する」(21)、「聖書神学者は、聖書の視点が歴史的、社会的に規定されていることを発見した」(22)、「教義の歴史的起源、教義の解釈者の歴史的背景は無視できないからである。いかなるタイプの神学にとっても、歴史相対主義のディレンマからのがれる可能性はまったくないと思われる」(23)、「批判哲学と批判的神学とは理性的主体に、その新しい自己認識によって課せられた制約を受け入れ、そして制約を持つ原理によって経験を批判、解釈し、導くという謙遜な任務を引き受けたのである。」(24)

4) 批判的歴史的神学の限界と可能性、制約の中における信仰の妥当性 (= トレルチ)

「批判的歴史的神学は、宗教的生の形態がその神学の歴史的体系の限界を超えたすべての場所で、すべての時代にどうあるべきかを指示することは決してできない。しかしみずからもその一部をなす歴史のわく内においては知的に納得のゆく範型を捜し求めることはできる」(24)、「教会の中で自己批判と自己認識の仕事を営みつづける告白的神学である」、「相対主義は主観主義や懐疑主義を意味しない。自分の観察が彼の視点によって規定されていることを告白する人が、彼のみている事物の現実性実在性までも疑わねばならないということは自明ではない。自分の持つ概念が普遍的でないことを知る人は、その概念が普遍性についての概念であることを疑わねばならないということも言えない。」(25)

「われわれが心理的、歴史的に規定された経験において見る事柄を現実として受け入れることは、常になんらかの信仰の行為である。しかしその信仰は不可欠であり、またみずから存在理由を持ち、そのもたらす結果によって正当化される。批判的観念論は常に、陰に陽に、感覚によって媒介される事柄が、そのものとして実在することを信仰において受け入れる」、「批判的実在論を伴っている」、「歴史的相対主義は歴史的主体に対する批判、歴史によって媒介される批判等、あらゆる批判の中で信仰によっておのが道を歩むことができるし、そうせざるを得ない」(26)、「歴史的信仰は、検証される可能性を持たない私的、主観的なものではない」、「同じ視点に立って同じ方向を見ている仲間の経験による検証や、その共同体内の過去の経験から成長してきた原理や概念との整合性による検証」(27)

「宗教的理性を歴史の領域に限定しつつなお、限定された領域における作業によって、キリスト教の歴史的社会的生の、よりよい知的、実際の組織が産み出されるという希望を抱くことができる」(27)、「したがって、神学はキリスト教史の内側でキリスト教史から始めなければならない。なぜならば、そのほかには選択の余地がないからである。この意味で神学は啓示から出発することを余儀なくされている。ここで啓示とは単に歴史的信仰を意味する」、「客観的に相対主義的である。」(28)

12. 抽象的な普遍主義・客観主義ではなく、具体性から出発し普遍性を展望する相互主観主義。→ 経験の共有可能性と翻訳可能性を前提にして、他者との合意形成に努力する開かれた知性。批判的実在論。

イエール学派(ハンス・フライ、リンドベック、ハワーフス)の神学伝統へ。新しい教会神学(教会共同体で読まれる聖書、キリスト教独自の「語り」の再興、キリスト教の内の促しとしての神学)。キリスト教は共同体の物語である。

8. ブルトマン学派と解釈学的神学

(1) ブルトマン学派

1. ブルトマン学派、1950年代～60年代、聖書学から教義学へ。

フックス、エーベリング、リンネマン、ユンゲル

2. 後期ハイデッガーと言葉の出来事

Das Sein als Geschick, das Wahrheit schickt, bleibt verborgen. Aber das Weltgeschick kündigt sich in der Dichtung an, ohne daß es schon als Geschichte des Seins offenbar wird. (Wegmarken, 339)

真理(Wahrheit)は客観化され普遍される超時間的なものではなく、自らを隠しつつ顕わにする存在の歴運(Geschick)において、自らを出来事として生起(性起 Ereignis)する。

↓

時間・歴史が意味や真理の領域に属する。この真理の歴史的生成の中で、人間の真理への応答がなされる。

○. ペゲラー『ハイデッガーの根本問題——ハイデッガーの思惟の道』晃洋書房。

辻村公一編『ハイデッガーと現代』創文社。

ハイデッガー全集解題(大橋良介)、ハイデッガー命題集

(2) 解釈学と神学

3. 聖書解釈と哲学

・聖書解釈学の意義：規範的・典型的あるいは特殊的(リクール)

・神学と哲学との相互連関：

「一九六〇年代に表面化したキリスト教内の神学運動は、人類の生活のこのような世界史的变化に対応しようとする哲学運動と密接に関連している」(森田、33)、「哲学思想の動向を考え合わせて整理するなら、六〇年代以後に現われた新しい神学動向のうち有意義と思われるものだけを挙げるならば、次の四つの流れに大別されるであろう。

一、解釈学としての神学

二、歴史の神学(宗教学・宗教史の神学、科学論の神学)

三、希望の進学・革新の神学(解放の神学)

四、プロセス神学(35-36)

解釈学、批判的合理主義、フランクフルト学派、プロセス哲学

4. ブルトマン

「理解しようとするような一切の解釈の前提は、テキストのなかで直接あるいは間接に語られている事柄への、そして問いの Woraufhin を導く事柄への前もって持っている生の関係である。・・・すべての解釈は、問題になっていた、あるいは問われていたりする事柄についてのある確かな先行理解によっひ必然的に支えられている。」(「解釈学の問題」、『神学論文集Ⅱ』新教出版社、298)

「聖書の学問的解釈の場合は、その Woraufhin は、聖書のなかで表わされている、人間の実存の理解を問うことのうちに見出される。」(305)

5. リクール

解釈学：回り道・間接的表現を経て自己へ。象徴から言語そしてテキスト、隠喩

・「解釈学とは、テキスト解釈との関連における、了解の操作の理論である」(「解釈学の課題」、『解釈の革新』白水社、143)

・個別的解釈学から一般解釈学へ：シュライアマハー、ディルタイ

・認識論から存在論へ：ハイデッガー、ガダマー

・解釈学と批判主義、ガダマーとハーバーマス

・哲学的解釈学と聖書解釈学

トンプソン『批判的解釈学——リクールとハーバマスの思想』法政大学出版局。

塚本正明『現代の解釈学的哲学——ディルタイおよびそれ以後の新展開』

世界思想社。

(3) 解釈学的神学の試み→ポストモダンへ

6. イエスとパウロの関連性

イエスとパウロ（新約聖書神学の前提と新約聖書神学自体）との分裂、さらには、旧約聖書神学と新約聖書神学との分裂、という事態に対して。

「譬えという言葉の出来事」と「信仰義認論という言葉の出来事」という仕方での関連づけ（ユンゲル。 Eberhard Jüngel, *Paulus und Jesus*, J.C.B.Mohr, 1962）

7. 小田垣雅也

「解釈学的神学が意図していることは一つの哲学的神学の建設である」（小田垣 1、4）

「神の啓示と、それをうけとる人間の主体性の関係」

「神学と哲学とを橋わたししようという努力」

「神が開示、即ち啓示される出来事から出発する神学」（11）

「キリスト論の競合的要素の一方を落としたキリスト論を閉鎖的キリスト論と名づける」

(19)

「主観一客観構図による神認識を超越するそれぞれの努力」（小田垣 2、170）

上からのキリスト論：バルト、啓示から、神の子・受肉

下からのキリスト論：自由主義神学、パネンベルク？、歴史・経験から、
人間イエス

キリスト論の循環構造：存在の順序と認識の順序、問いと答えの循環（循環の出来事的生起）

8. 聖書解釈学の現場より、議論を再構築すること。

聖書解釈という営みは何か？

9. ポスト近代を自覚的に生きる哲学

・啓蒙主義（啓蒙主義的な普遍的理性・認識論的）以降

・形而上学的思惟以降：ニーチェとハイデッガーのラインで

・制約された自由、媒介された思惟 → 全包括的で絶対的に確実な直接知の断念
弱い思考

・表現を介した自己への接近：歴史性あるいは伝統

10. ポストモダンではあるが、モダンの帰結でもある。

シュライマハーの転換の帰結：教義学から信仰論へ
言語性と解釈史

↓

ポストモダンの思想状況で、神学的知はいかなるものであり得るか。

(4) ユンゲルの場合

11. ユンゲル『パウロとイエス』（1962）：イエスとパウロという古典的問い。今世紀のプロテスタント神学において、キリスト論の中心性の強調（バルトとブルトマン）によって無視されてきた史的イエスの問いを、キリスト論自体が史的イエスの問いを誘発するという点から、再度しかも新たに提出（イエス・キリストの人格性あるいは啓示の歴史性の問い（キリスト論的問い）が史的イエスの問いとして提起されねばならないということ）。

12. イエスの神の国の宣教とパウロの信仰義認論との関係性の問いとして提起される。

フックスやエーベリングらの用いる言葉の出来事という概念をイエスの宣教とパウロ神学に適用することによって、両者の出来事の連続性を問うという方法論。

13. Ein solches Sprachereignis ist die paulinische Rechtfertigungslehre. In ihr ist Jesus als Christus so zur Sprache gekommen, daß er als der die Verkündigung und die Theologie des Apostels einigende Grund sichtbar wird. Dieses Ereignis, daß die christliche Verkündigung Gegenstand einer sie explizierenden und verteidigenden Theologie wird, ist das Sprachereignis der paulinischen Rechtfertigungslehre. (3)

in der Verkündigung des Auferstandenen wird "ein durch die Macht der Kausalität historisch entfaltetes Nacheinander in dasjenige Beieinander" zurückgeholt, das durch die durch Tod und Auferstehung Jesu neu qualifizierte Geschichte selbst gefordert ist. Weil "im historischen Jesus

Gott selbst *begegnet sein will*", bleibt auch in der Verkündigung des Glaubens der Glaube an den historischen Jesus gebunden. "In seiner Frage an uns kommt Gott wie in Jesus so durch die Predigt von Jesus auf uns zu", weil "in der Verkündigung der Auferstehung gerade der historische Jesus auf uns zugekommen *ist*". Das bedeutet für das Verhältnis von Paulus zu Jesus, daß die Theologie des Paulus durch den historischen Jesus bedingt *ist*, weil die Glaubenspredigt durch den historischen Jesus bestimmt *bleibt*. (15f.)

14. 「イエスの宣教が神学の対象となる」という言葉の出来事

・一連の言葉の出来事の動態：

イエス (Predigt, Verkündigung) →パウロ (Theologie)

後者は前者を前提とする、前者は後者を要求する

両者は史的イエスの死と復活によって繋がれる

イエスの不在がテキストと神学を要求し、イエスのキリストとしての復活がテキストと神学を可能にした

「神と人間との関係」の事柄としての広義の終末論

この二つの言葉の出来事は終末論として同質である

15. イエスの宣教という言葉の出来事がイエスの態度（隣人と神とに対する関係）において明示されるかぎりにおいて、この宣教に対するイエスの態度の関係が史的イエスに関する問いの神学的基準となる。

16. 「言葉の出来事」を理解するという課題：歴史的批判的方法論、つまり近代聖書学の方法論の助けを借りつつも、まず何よりも問われている「事柄自体へ」(zu den Sachen selbst) というフッサールの現象学的態度（第一義的には批判的ではなく、受容的あるいは記述的）においてアプローチする。

事柄が与えられているがままにまず受け取り（受動、聴く）、そこから語られている限りにおいてその事柄に遡るといふ態度である(5)。これは与えられた形式におけるテキストを尊重することであり、テキストに対する不当な暴力からテキストをテキストとして取り戻す試みといえる。den Text als Text zu wiederholen(5)

16. Fuchs:

Für die Frage nach dem historischen Jesus nimmt Fuchs die Briefe des Apostels Paulus als die die "Sache" Jesus bezeugende "Quelle" in Anspruch. (15)

Es gibt sich von hier aus eine "Kontinuität" des paulinischen Kerygmas mit dem historische Jesus insofern, als "der historische Jesus wesentlich Inhalt des Kerygmas ist", so daß Fuchs sagen kann: " Der sogenannte Christus des Glaubens ist in der Tat kein anderer als der historische Jesus".(15)

Das bedeutet für das Verhältnis von Paulus zu Jesus, daß die Theologie des Paulus durch den historischen Jesus bedingt *ist*, weil die Glaubenspredigt durch den historischen Jesus bestimmt *bleibt*.(16)

17. ユンゲルはこうしたフックスの問題意識を受け継いで自らの議論を展開しているのである。ユンゲルの問題は次のようになる (16)。

1. 史的イエスはどこまで新約聖書神学に属しているか
2. 史的イエスの十字架にかけられ復活した主と宣教するのに、パウロはどの程度神学者でなければならないか。
3. これは、イエスの宣教に対するパウロの信仰義認論の関係を論じる際に、何を意味するか。
4. この関係に対する終末論的モチーフの意義
5. 史的イエスがどの程度終末論的の主題となるか。
6. いかなる終末論的意味において、史的イエスはパウロの義認論の中で語られるか。
7. ここから、イエスの宣教とイエス・キリストへの信仰の間に、どんな関係が出てくるか。

18. 20世紀の新約聖書学において、イエスとパウロの断絶は一種の合意事項となった。この合意事項はユンゲルをも規定している。

- 1) 終末論という問題設定の特権的位置づけ → 1980年代以降
- 2) 歴史的批判的方法論の内部に立ち入った批判的乗り越えの欠如
外部批判、聖書学そのものの反省の欠如
(歴史学の対象となりうる史的イエスが神学の事柄に属していること。十字架と復活の主という神学的対象は、史的イエスと神学との接点、あるいは十字架・復活は歴史と神学との複合語・混成語。内容的には終末論が両者を媒介とする。)

(5) ヴァッティモの場合

19. 「弱い思考」

多元性、歴史性という前提における思考

20. 絶対的で唯一の思考の枠組みとしての形而上学 (=強い思考) は成り立たない。

21. しかし、相対主義という無思考性でもない。

<存在>の歴史への信頼

22. ヴァッティモ「弁証法、差異、弱い思考」(『弱い思考』法政大学出版会。)

「「強い」思考、推理を演繹的に進めていかざるをえない思考」(10)

「わたしたちが出発点とすることのできる経験」「概して日常的な経験」(10)、「歴史的な性質を付与され濃密な文化の累積を支えとする経験」、「<現存在>は被投的な存在」(11)

「部分的でない観点、ひいては全体を全体としてつかみとることのできる観点」(12)

「進歩への信仰」(14)、「単一の直線としての歴史は、勝者の歴史にすぎない」(15)、「弁証法や統一性そのものを犠牲にしても、批判的要請を妥当させようとしたこと」(16)

「形而上学を形づくっている強い構造」(18)

「出来事性」(21)「存在(という概念)が弱体化し、その時間的本質が明白になったということ」(22)、「差異の思考が弱い思考へと屈曲する」(23)

「存在の安定した構造の終焉」「神は存在するとか存在しないとか言明するあらゆる可能性の終焉」、「屈曲は、伝達と運命=送付というように解された存在の真理を思考するさいの仕方」(24)

「追憶のなかでのみ接近する」(25)、「その遺産へと、かつて生きてきたものの痕跡に起因するピエタース」(26)

「価値の転倒はわたしたちの歴史の次の諸世紀を満たす運命にあるのだった」(26)

「真理の地平、もろもろの命題の検証と反証が可能になる領域を開くのは、伝達であり、運命=送付である」、「わたしたちが遺産として受けとってきたものにたいするピエタースの力」、「尊敬の感情」(30)

「ピエタースも歴史的に異なっている」、「解釈学のさずさわる、この仕事」、「心理の概念についての弱い存在論」(31)、「真理の「修辞学的な」とらえ方」(32)

「思考に付与してきた主権性の立場をもはや要求できなくなる」(32)、「思考そのものの投企力の減少を理論化すること」(33)、「存在を伝達および記念碑として思考する弱い存在論」、「伝承させる世襲財産は、単一の総体ではない」(33)

「勝者たちの歴史が積み重ねてきた廃墟」「これらの廃墟へのピエタース」(34)

「新しいものを他の文化としての他のものと同視すること」、「超形而上学的な人間性を準備すること」(34)

23. 『哲学者の使命と責任』

1) 「哲学と科学」

「形而上学にかんするハイデガーの議論の意味するところをガダマーはほんとうには受け入れようとしていないこと」、「ガダマーがハイデガーの形而上学批判を受け入れるのは、なによりも科学主義ないし科学客観主義にかんしてである。ハイデガーのいう真の意味での<存在>の歴史といったものはガダマーの念頭にない。」(13)

「わたしはハイデガーと同じく、科学を現代における<存在>の運命の本質的な一側面であるとみているからである」(14)

「世界像は本質的に複数の像に転化する」(15)

「これらはすべて<存在>の命運にかかわる出来事である」(16)

「ガダマー」「相対主義とヘーゲル主義の中間に立ち止まってしまっている」(20)

「弱い思考こそヘーゲル主義に取って代わることのできる唯一のオルターナティブなのではないだろうか。もし理性の最終的自己確証に向けての過程がないとしたら、あとには弱い存在論という着想しか残らないのだから」(21)

「もしなんらかの純粋な相対主義に陥ってはならないとするなら、しかしまた他方、ヘーゲルから究極的絶対性の理念、すなわち完全な自己意識という理念を奪い去ってしまったなら、なにを代わりに置けばよいだろうか。運動の原理に転化した[「存在」と「存在者」の]存在論的差異の原理に訴える以外にないのではないか」(22)

「存在者の直接性を乗り越えてなにか別のものに向かうひとつの仕方」「おそらくはもっと「完璧な」かたちで、科学はまさしく<存在者でない存在>を代表している」(24)

「絶対主義的な」存在論、すなわちヘーゲル的な存在論」(25)

「弱体化してきた存在の歴史」(28)

2) 「哲学、歴史、文学」

「レトリックとしての真理」「真理は」「説得の問題である」、「哲学が使用する論法は複数の人間を相手にした論法であって」、「説得によって明らかにされる真理なのである」、「人びとが広く分かちあって前提から出発して解釈しようという提案」(41)

「哲学において問題となる真理は複数の人間を相手にした説得の成果であるが、ハイデガーのいう<存在>の歴史への一定の信頼にもとづいている」(42-43)

「<存在>の歴史への信頼」、「それらがそのような古典に転化してしまったという事実はわたしをも渦中に巻き込んでいる。わたしという存在は大部分、古典が執拗に存続しているおかげで生まれたものなのだ」、「ガダマーが先入見の果たす積極的な意味での根源性を主張し、客観的精神の意義を強調しているのは、一理あることだった。わたしが結局ふたたびキリスト教信者になったのも、同じ理由による」、「歴史にはなにか神のようなものが存在する」(43)

「自分たちは神によって造られた存在であるという意識とでも呼んでよいもの」、「わたしたちは自分の力でこの世に存在しているわけではなく、他の者たちのおかげでこの世に生を享けている。そして、この事実こそわたしに遺贈された財産なのだ。この世で唯一わたしが手にしている大切な財産なのである」(44)

「教化としての建設には知の累積していくという意味も込められている」、「哲学が関係するみずからの過去は最終的に確定された土台としての過去ではなく、つねに新たな解釈へ開かれている可能性の総体としての過去」(45)

「研究の伝統」「この意味では哲学と文学的解釈学と科学には連続性がある」、「じっさには事件の場合にも、そこで使用される言語や実験方法は歴史的に規定されているという問題が生じる」(46)

「科学の「歴史を超越した」姿勢は存在論の立場と区別がつかなくなってしまう」、「歴史に注目しすぎると、存在論から遠く離れたところへ運ばれていきかねない。これは解釈学にたいして構造主義者が突きつけてきたおなじみの異議である」(47)

「エアアイクニス[性起]としての<存在>というハイデガーの概念」「<存在>がほんとうにエアアイクニスであるなら、そのときには<存在>そのものが歴史であり時間であり出来事のものであることになるのだ」、「歴史が存在者に特有のものであるというのは真実である。が、逆説的なことにも、存在者に注目しすぎると、存在者そのものを非時間的なもの見なすようになる」(48)

「神の死についてのニーチェの告知」、「神の死というのはむしろ、わたしたちが巻き込まれているもろもろの出来事の経過を見やっ、大胆にも「神はもはや必要でない」と認めてみよう」と解釈したものなのだ。「神は死んだ」という告知は、科学と技術のおかげで原始人が感じていたような恐怖なしに生きられる世界では神はもはやなくてもかまわない、と人びとが広く認めていることの証にほかならない」(49)

「ニーチェの解釈で神がもはや無用の嘘であることが露わなるのは、ほかでもない神への

信仰によってわたしたちの個人的・社会的な生活になかに導き入れられてきたもろもろの変容によるものなのであった。つねに安定と安心の原理として機能してきた神は、つねに嘘を禁じてきた神でもある。だから、信者たちが「神が存在するというのは嘘である」と言明するのも、神の命令にしたがってのことなのだ」(50)

「真理の経験を本質的に解釈的なものであると認めるのはそれ自体がひとつの解釈であることが認められる。また、真理が歴史的なもの(地平的なもの)であるという理論はそれ自体がひとつの歴史的な真理として受け入れられるのである」(51)

形而上学という枠から、存在の歴史、メタ言語の自己意識への緩める。

3) 「哲学における論理」

4) 「真理を語る」

「神が死ぬように真理も死ぬ、とわたしにははっきり言える。そして、キリスト教で神の死(そして誕生)は神のひとつの側面であり、神の本性の一部をなしているのとまったく同じように、矛盾した真理の死も真理の本性の一部をなしているのである」(94)

「<存在>の歴史はもろもろの出来事できあがっている」、「それらは」「偶発的な事故」ではない。それらは<存在>の性起なのだ。真理は、その歴史とともに、こうした<存在>の性起のひとつなのであって、振り払おうとしても無理なのである」(95)

5) 「哲学への召喚と哲学の責任」

<参考文献>

1. ブルトマン「解釈学の問題」(『ブルトマン著作集』12、新教出版社)
2. ガダマー『真理と方法』法政大学出版会。
3. リクール「解釈学の課題」「疎隔の解釈学的機能」「哲学的解釈学と聖書の解釈学」(『解釈の革新』白水社)
4. E. ユンゲル『パウロとイエス』新教出版社。
5. 森田雄三郎『現代神学はどこへ行くか』教文館。
6. 小田垣雅也『解釈学的神学』『哲学的神学』『知られざる神に——現代神学の展望と課題』創文社。
7. J.B. Webster, *Eberhard Jüngel. An Introduction to his Theology*, Cambridge University Press, 1986.
8. ジャンニ・ヴァッティモ『哲学者の使命と責任』法政大学出版会。
9. ジャンニ・ヴァッティモ、ピエロ・アルド・ロヴァッティ編『弱い思考』法政大学出版会。
10. Richard Rorty, Gianni Vattimo, *The Future of Religion*, Columbia University Press, 2005.
John D. Caputo, Gianni Vattimo, *After the Death of God*, Columbia University Press, 2007.
Gianni Vattimo, Santiago Zabala, *Hermeneutic Communism. From Heidegger to Marx*, Columbia University Press, 2011.
11. Thomas G. Guarino, *Vattimo and Theology*, T & T Clark, 2009.
12. 佐藤啓介「ジャンニ・ヴァッティモの宗教論——神の死以降の愛論の可能性」(宗教哲学会『宗教哲学研究』No.29 2012、昭和堂、57-69頁)
13. 芦名定道「現代思想と〈神〉の問い——ティリッヒからジジエクまで」(『理想』No.688、2012、40-52頁)。
14. 解釈学と神学、弱い神、アメリカ
・ John D. Caputo, *More Radical Hermeneutics*, Indiana University Press, 2000.
・ , *On Religion*, Routledge, 2001.
・ , *Philosophy and Theology*, Abington Press, 2006.
・ , *The Weakness of God. A Theology of the Event*, Indiana University Press, 2006.
15. Ingolf U. Dalferth, *Radical Theology. An Essay on Faith and Theology in the Twenty-First Century*, Fortress, 2016.